『源氏物語』における「愛」の研究　その Ⅱ
浮舟造型に見られる「愛」の研究
―社会関係論的一考察―

和田方子

序章　問題提起

社会関係論の立場から，『源氏物語』宇治大君造型に見られる紫式部の「愛」の理念を考察した拙稿Ⅰにひきつづき[1]，本稿では，浮舟造型における式部の「愛」の追求過程を考察する。

本稿における「愛」の概念も，前と同様に「当面する存在（第二者）を，独自性と一回性をそなえた価値ある者として体験しあい，各々が，自身の，また相互の主体性を守りつつ，その個人性を越えて相互内在化に進むところの，人格的融和関係への志向」の意味に用いられる[2]。

「たち花の小嶋は色も変らじをこの浮舟ぞゆくへ知られぬ」と詠ったところから，浮舟と呼ばれているこの女性の父は宇治八宮，母は八宮に仕えた女房，中将君であった。したがって浮舟は，宇治大君の異母妹にあたる。(図1)

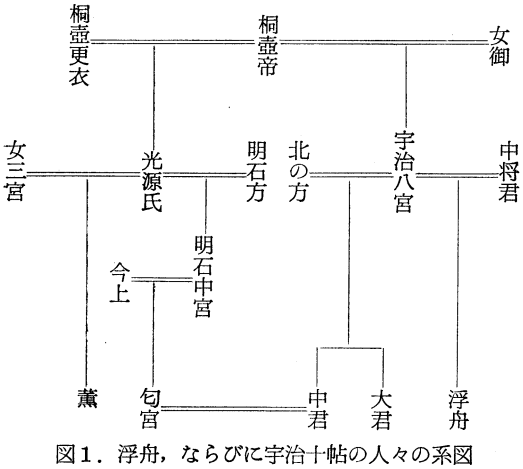

図1．浮舟，ならびに宇治十帖の人々の系図

しかし，浮舟は，父からは娘と認められず，やがて常陸介の妻となった母にともなわれて東国にくだって，その地でひととなった。その後常陸介一家は都にのぼり，ゆくりなくも浮舟は薫に知られて，大君ゆかりの地，宇治に据えかくまわれることとなる。けれども，今は今上の女二宮を賜わり，大将ともなった重い身分の薫の訪れは，とぎれがちである。そのすきに乗じて，薫の親友，匂宮は浮舟のもとに忍び，その心を奪ってしまった。忘我に導く匂の熱情と，物深く，将来を頼むならまさにこの人と思わせる薫の沈着さ，心ばえのやさしさの間で，そのいずれをも選びえず拒みえず，浮舟はたゆたう。何も知らない母や乳母たちは，京に迎えられる日も近い浮舟の思いがけない幸せを，ひたすらに喜んでいる。懊悩きわまった浮舟の，我が身の処遇は，川音凄じい宇治川に，身を投じることであった。先つ頃も，渡守の孫の童が棹をはずして水死した，というではないか，そのようにして，行方知れずになってしまいたい――。

自殺を知った周囲の人々は，形ばかりの葬儀を済ませて，すべての事実を隠蔽してしまった。浮舟という一人の女性の存在が消えても，一時の衝撃と嘆きこそあれ，何ごともなく，薫と匂の都の日々は過ぎてゆく。しかし，浮舟は横川僧都に助けられ，新しい生を辿りはじめていた――[4]。

この浮舟の死と，横川僧都に助けられてはじまる浮舟の新生のうちに，私は紫式部の，『源氏物語』における「愛」の追求の軌跡の果てを見るものである。それを本稿の仮説とする。

（1）拙稿，「『源氏物語』における「愛」の研究，そのⅠ．宇治大君造型に見られる「愛」の研究」関西学院大学社会学部紀要第19号

（2）「愛」についての一般的記述は，拙稿前掲論文第Ⅰ章

（3）『源氏物語』「浮舟」，日本古典文學大系18，岩波書店，273ページ。以下，本稿における『源氏物語』からの引用は，日本古典文學大系による。

（4）『源氏物語』「東屋」以下の要約

第Ⅰ章　浮舟の死をめぐる「愛」の研究

たおたおと心もとなげにばかり見えた浮舟を，あえて自殺などという「おずかるべき」行為[1]に追いやったものは，何だったのであろうか。本章では，紫式部の「愛」の追求過程上に位置づけて，浮舟を死に至らしめた要因の考察を試みる。第1節では，社会関係の背景となり，社会関係に介入する巨視的要因を，第2節では，社会関係そのことにおける微視的要因を，それぞれ考察することとする。

第1節　巨視的要因

歴史社会学派と呼ばれる先学の諸家が示しておられるように[2]，紫式部の問題意識には，わけても，出生に規定される身分制社会と，一夫多妻制によく見られる，女性の地位の後退化のことがあったであろう。それらが，かけがえのない人格の交流である「愛」を阻む要因となることを，式部は「物語」においてくりかえし述べてきた。

A．身分制的社会規制による「愛」の阻害

女房との間に生まれ，その認知さえも拒まれた劣り腹の娘なればこそ，薫も，大君や中君には決してとらなかった果敢な，ほとんど礼を失したと言ってよい態度を，浮舟にとった。「やむごとなく思ひそめ，始めし人」[3]とは，明らかに一線を画して遇するのである。匂が，あえて親友を裏切ってした密通も，浮舟が薫の正妻とされていない，ひそかな通いどころであったからにほかならない。薫にとっても匂にとっても，品劣る浮舟は尊重するに足らぬ者だったのである。

自身受領階級の出身であった式部は，桐壷更衣をはじめとして，『物語』のヒロイン達を多く，高からぬ身分に設定し，そのことのゆえの苦悩を与えてきた。『物語』最後の主人公，浮舟において，その苦悩は最も深刻なものとなる。浮舟をめぐる恋において，薫も匂も浮舟も，それぞれに悩み，苦しむ。しかし，後見も定かでない軽い身分の浮舟が最も深く悩み，追いつめられるように死に赴くのである。

浮舟については，第一部，第二部における朧月夜尚侍，女三宮との比較がなされ[4]，その性格とともに，二人の男性と結ばれるという立場上の類似性が挙げられる。しかし，これらの高貴な女性には，常に庇護を期待してよい，確たる寄辺があった。世俗の生につまずけば，その庇護のもとに，穏やかに出家の道を辿ることができた。それはしかし，寄辺なく，薫に据えられている浮舟には，およびもつかない道であった。

B．女性の地位の後退化における「愛」の阻害

『物語』第一部・第二部には，源氏という一人の男性と多数の女性との放射線的な関係が描かれ，そのために苦悶する女性たちの姿が描かれていた。そうした女性たちの苦悩の体験を観念的に受けとめて，ひたすらに結婚を忌避する大君が第三部前半に造型されたのであった。だが，つづく浮舟は，幾分次元を異にして造型されている。複数の男性の中心として苦悩を負う浮舟に，一夫多妻における嫉妬の煩悶はほとんど見られない。しかし，実際浮舟の心理がいかにあろうとも，浮舟は薫にとっても匂にとっても，変わることなくかけがえのない存在というのではなく，多妻とも言うべき，多数の女性群の一人にすぎないのである。

政治・経済的活動の諸場面から追われて，平安貴族の女性の地位は次第に後退化しつつあった。婚姻形態は自由な対偶婚的でありながら，一夫多妻の状態に傾いていた[5]。社会倫理は女性の側にのみ厳しさを加えてゆく。浮舟がそれに習った万葉のおとめ達の自殺は，いずれも，二人・三人の男性との恋そのものを悩んでの結果であった[6]。しかし，女房たちのさざめきを聞きながら浮舟が死を思うのは，ただに二人の男性の間で去就を迷って分裂する，その恋心に堪えかねたためばかりではなく，二人の男性の愛を受けることが，女性にとって，世間に顔向けならない恥しいこととされていたからである。ながらえて，我が身ひとつのみならず，母の末永い恥となるよりはむしろ，行方知れない死によってその恥を隠そうと心を決める。母は一時は嘆いても，多勢の弟妹たちの世話の明け暮れに，やがておのずと忘れ草を摘むこととともなるであろう——と[7]。

一夫多妻のゆえにまた，身分の低い女性が高貴な男性に想いを懸けられて，上流の階層に身分が

上昇する，ということはありえた。男性に比べて女性の方が，身分的可動性が高かったと言いうる。しかしそれはまた，後見者を失えばたちまち身分が下降する不安定性をも意味している。「女は，いと，宿世さだめ難くおはします物なれば，よろづに嘆かしく」と，式部の嘆息する所以である[8]。薫に見放されたら，恥である以前に，養父の家を出た浮舟には生きる道がおぼつかなくなるのであった。

かくて死に赴いた浮舟は，横川僧都に助けられ，小野の里に新しい生を始める。ここに，高貴な貴族の男性との交わりのうちに死に追いつめられた浮舟を救い，新生に導くのが，一人の僧とその妹であることの意味は深長と言えよう。「桐壷」の巻，貴族社会の中心である後宮にはじまった『物語』が，その末を，非貴族的な小野の里，尼僧の館に終わる過程のうちに，身分制や，後退しつつある女性の地位の問題も含めて，爛熟しきった貴族社会，そこにおける式部の恋愛否定の姿勢が窺われるもののようである。そして新たな「愛」の可能性を，「小野の里」に象徴される世界——それは横川僧都に導かれて存在するのであるが——に，式部は求めたのではなかろうか。平安文化のただ中で，自身その内に日常の生活を営みながら，はるか彼方から聞えてくる中世暁の鐘音に耳を傾ける，式部の孤独な姿が，そこに彷彿と浮かぶのである。

第2節　微視的要因

総じて言えば，「藤裏葉」にめでたく終わる第一部には恋の言寿が，女三宮降嫁によって起こる不幸の中で，源氏と紫上とが各々に道心を抱きつつ互いの存在のゆえに世を超ええない第二部には愛執の嘆きが，大君物語から浮舟物語に語りつがれる第三部には，そうした恋愛の否定と，別の価値観による「愛」の追求が述べられている，と言うことができよう。

恋と美とが，あるいは美であるゆえに恋が，高い社会的価値を承認されていた平安貴族社会の内にあって，式部は恋の持つ恣意性，暴力性にも目を注めずにはいられなかった。匂は恋のために，あえて長年来の親友である薫を裏切り，一途に激しい熱情を浮舟に浴びせる。そして，そのことが浮舟の煩悶を深めることを顧みない。浮舟もまた，匂との恋が，彼の妻であり自身の姉でもある中君を不幸にし，薫を裏切り，母に恥を負わせ，自身を破滅に導くものであることを自覚しつつも，その恋に陥ってゆく。『物語』の中でも最も高揚した恋を浮舟と匂との間に描きながら，式部は，その恋による救いをではなく，その恋による滅びを，浮舟の死を，緻密に書きあげてゆくのである。

顧みれば，『物語』に語られる恋は，それによって幸せを増すよりむしろ，不幸を結果するものであることが多かった。『物語』第三部，宇治十帖の世界は，「苦悩の物語的表現」であると言われているように[9]，わけてもここに，恋から生じる不幸が，凝集的に描かれている。それは単に，身分や一夫多妻や，その他の文化的個性に由来する問題のみに還元することのできない問題であり，むしろ，社会関係の普遍的本質に関わる問題と言わざるをえない。

恋愛＝男女の愛に絶望した式部によって宇治十帖前半に造型された宇治大君は，薫との友愛，あるいは妹弟の愛に，まことの「愛」の可能性を求めた。しかし式部は，大君にその「愛」を成就させない。此岸における「愛」の限界を無言の内に訴えながら，嵐がちな冬の一夜，大君は「物の枯れゆくやう」に死に果てたのであった[10]。

新たに筆を起こした宇治十帖後半では，浮舟の死に至る過程に，式部は恋愛における「愛」の絶望を，決定的なものとして再び描いた。そして，横川僧都に助けられてする浮舟の新生，即ち彼岸との関わりになる浮舟の新生において，大君が挫折し，残して死んだ「愛」の可能性を，新たに追求したのではなかろうか。——以上が前稿における結論であり，また本稿に提起した問題点でもあった。以下に，章を新ため，その考察を試みることとする。

（1）「浮舟」第18巻265ページ

（2）秋山虔『源氏物語の世界』（東京大学出版会）『源氏物語』（岩波新書）石母田正，「紫式部」（『歴史と民族の発見，抄』新潮文庫収録），ほか。

（3）「浮舟」第18巻 257ページ

（4）本稿においては，『源氏物語』を，一般になさ

れているように，「相壺」から「藤裏葉」までを第一部，「若菜上」から「幻」までを第二部，以下を第三部として扱う。

（5）平安時代の女性の地位および日本婚姻史上におけるその位置づけに関しては，高群逸枝「招婿婚の研究」（全集第2巻，理論社）「日本婚姻史」（同6巻）に詳しい。なお，中村吉治氏は『家の歴史』（角川新書）に，女性の地位の低下を考察され，それを社会の支配的力が呪術から技術へと移行していった過程と相関して考えることができる，と述べておられる。

（6）「菟原処女の墓を見る歌一首短歌を幷せたり」万葉集巻九(日本古典文學大系第5巻148ページ)には，血沼壮士と菟原壮士の二人が激しく菟原処女を求め，生命を賭して競うとき，処女の母に語ることばとして，次のように詠われている。

「…吾妹子が母に語らく　倭文手纏賤しきわがゆゑ　太夫の　争ふ見れば　生けりとも　逢ふべくあれや　ししくしろ　黄泉に待たむと…」

また，万葉集巻十六(日本古典文學大系，第7巻)には，同じようにして死んだ桜児・縵児の伝説が詠われている。

（7）「浮舟」第18巻 265ページ

（8）「若菜上」第16巻 221ページ

（9）藤村潔『源氏物語の構造』（桜楓社）41ページ

（10）「總角」第17巻 462ページ

第Ⅱ章　浮舟の新生をめぐる「愛」の研究
——微視的考察——

本章においては，浮舟の蘇生と出家，そして横川僧都の書簡に見られる浮舟の還俗問題を中心に，浮舟の新生をめぐる「愛」を考察することとする。

A．浮舟の蘇生と出家

宇治の院の木の下に，半死半生で臥している浮舟を助けたのは，横川僧都の持つ「人間，あるいは生命そのものへの『愛』」ともいうべき，高い精神であった。周囲の者みなが，変化の者と気味悪がり，不吉として捨てさろうとする中を，僧都一人は，

まことの，人のかたちなり。その命，絶えぬを，見る見る，捨てん事は，いみじき事なり。池に泳ぐ魚，山に鳴く鹿をだに，人に捕へられて，死なむとするを見て，助けざらむは，いと，悲しかるべし。人の命，久しかるまじき物なれど，残りの命，一二日をも惜しまずは，あるべからず。鬼にも，神にも領ぜられ，人に，おはれ，人に，はかりごたれても，これ，横ざまの死にを，すべき者にこそあめれ。仏の，かならず救ひ給ふべき際なり。なほ，心みに，暫し，湯を飲ませなどして，助け，心みむ。遂に死なば，いふ限りにあらず(1)。

と助けさせる。高い身分のゆえではなく，他のすぐれた特性のゆえでもなく，ただ「人間」であるゆえに，「仏の，かならず救ひ給ふべき際」として，かけがえもなく尊い者であり，見捨てえない者である，とする僧都の態度のうちに，「愛」の根本理念の具現が見られるのである。妹尼君にひきとられた後，回復のはかばかしくない浮舟のために加持を頼まれた際も，僧都は，女性と親しく関わることに対する誹謗を覚悟の上で，それに応じた(2)。そして「この修法の程に，しるし見えずば（命も賭けん）」と(3)，どこのだれとも知らぬ浮舟のために，必死の加持の一夜を明かすのであった。

回復した浮舟は，昔の山里よりも水音も和やかな小野の里に，尼君とともに隠棲することとなる。老いはしても，「いと清げに，由ありて」(4)品位高い様子で住みなしている尼君や，他の尼たちの平和な姿を見るにつけ，浮舟には，匂と恋を交わした昔の生活は，「怪しからぬ」ことと否定され(5)，出家への願いが切実なものと募るのだった。尼君は浮舟の突然の出現を，死んだ娘の再来と喜び，娘のかっての婿だった中将に浮舟を妻合わせようと尽力する。しかし，浮舟にはそうした「世の中のこと」に対する関心はすでにない。

一日，京に向かう途中，僧都が小野を訪れた。幸い，尼君は初瀬に詣でて留守である。千載一遇の好機の到来に，浮舟は懸命に出家のことを願った。出家は，仏も「いと，かしこく褒め給ふ事」(6)ではある。しかし，人間の心は決断のままに不動のものではないことを深く知り，まして浮舟が，うら若く弱い女性であることを思う時，僧都はあえて，剃髪を思いとどまるよう，浮舟をさとさずにはいられない。しかし，口下手な浮舟が訥々と，思いあまるふうに泣きながら頼むそのひたむ

きな姿を，いかにもいとおしく思い，僧都は浮舟を出家に導いた。手ずから額の髪を剃いで仏弟子となした浮舟に，僧都は尊い事どもを説ききかせ，世の無常を説ききかせて，仏道の修業を励ます。また，存命の限りは自身必ず浮舟を見守ることを誓い，慰めて，僧都は去っていった。

「その頃，横川に，『なにがしの僧都』とかいひて，いと，尊き人，住みけり」と，「手習」の巻に書きおこされ，(7) 横川僧都と読者に呼ばれるこの僧都は，しばしば，横川に閑居して『往生要集』を著した恵心僧都源信（942 — 1017）をモデルとして造型された，と言われている(8)。確かに見てきたように，因襲的思考様式にとらわれず，深く人間性を知って，人間を「愛し」，その救いに心を砕く横川僧都は，浄土教の礎石を据えた源信の面影と重なるところが多い。

この僧都に導かれて本意が叶った浮舟の心は晴れた。法華経をはじめ，多くの法文を読んで行いに精を出し，時には尼君と戯れ交わすようにさえなった。しかし浮舟の存命は，やがて薫の知るところとなる。薫は僧都に再三依頼して文を賜わった。それを自身の文に添え，浮舟の弟で親しく側に使っている小君を使者として，浮舟の許に送った。

僧都のこの書簡をめぐり，浮舟の還俗が論議されている。浮舟の「愛」を問う本稿にとって，それは重要な意味を持つ問題であるので，次にその考察を試みることとする。

B．浮舟のいわゆる還俗問題

はじめに，僧都の手になった書簡の問題となる箇所を示せば，それは，以下の通りである。

> 今朝，ここに，大将殿の物し給ひて，御有様たづね問ひ給ふに，初めより，ありしやう，くはしく，聞え侍りぬ。御心ざし深かりける，御中を，そむき給ひて，怪しき山賤の中に，過ごし給へること。かへりては，仏の責め，添ふべき事なるをなん，うけたまはり，驚き侍る。いかがはせむ。もとの，御契り，過ち給はで，愛執の罪を晴るかし聞え給ひて，一日の出家の功徳，はかりなき物なれば，なほ，たのませ給へ(9)。
>
> （以下略）

先述のように，この書簡が浮舟の還俗を勧めるものであるか否かをめぐり，さらに，浮舟は還俗するか否かをめぐって，先学の諸家が見解を述べておられる。しかし，定説は未だ見られない。文中「御契り」を，夫婦の契りと解釈するか，そのように限定されない一般的な意味での出会いの因縁と解釈するかによって，僧都が還俗を勧めると否との見解が別れるのである。そして，浮舟自身がそれにいかに応ずるかによって，浮舟は還俗すると否との見解が別れる。それらの組み合わせをここに整理すると，次の四説となる。

（イ）僧都は還俗を勧め，浮舟は還俗する。
（ロ）僧都は還俗を勧めるが，浮舟は還俗しない。
（ハ）僧都は還俗を勧めないが，浮舟は還俗する。
（ニ）「僧都は還俗を勧めず，浮舟も還俗はしない。

(イ)は中村良作氏に(10)，(ロ)は重松信弘氏・岡一男氏・秋山虔氏等に見られる(11)。手塚昇氏は，僧都は還俗を勧めると否とにかかわらず浮舟は還俗する，と主張されるので，広く(ハ)を解釈すればこの立場に立たれる，とすることができよう(12)。(ニ)の立場としては，多屋頼俊氏・門前真一氏・広川勝美氏らの諸説を伺うことができる(13)。

式部は『源氏物語』執筆のうちに恋愛を否定し新しい価値観による「愛」を追求するに至った，とする先に提起した仮説により，私は，(イ)・(ロ)・(ハ)の立場には立ちえない。立場としては(ニ)に属するのであるが，先学の諸家は，還俗を勧めないこと即一層の仏道修業を勧めること，とされるので，私とは，幾分ニュアンスを異とされることになる。私見によれば，僧都は仏の慈悲にすがり，その慈悲の内に身を置くことを勧めてはいるが，具体的には，還俗しろとも，するなとも指示してはいない。その決定は御仏の慈悲と浮舟の決断にゆだねている。そして浮舟は，自己の実存において，出家の道を選びとる——。以下にこの根拠を示すこととする。

第一に，僧都は具体的な身の処遇の指示はしていない（従って，還俗は勧めていない）という主張に関して，

（1）書簡文に即して考察すると，「今朝ここに……いかがはせむ」には，あきらかに僧都の驚きと迷いがあらわれている。「もとの御契り……たのませ給へ」は，その迷いの中から得た結論として，還俗を勧めるとも一層の修業を勧めるとも

また，具体的にはいずれをも勧めていないとも，解釈することができる。

山岸徳平氏は，還俗を勧める立場に立たれて，次のような口語訳をされる。

以前の夫婦の縁を間違いなさらなくて(還俗して)，もとの夫婦となり，薫の（御身に対する）愛着の罪障を晴らし（除き）申しなされ。そうして，只の一日だけ出家した功徳でも，無量無辺な物である（還俗して薫と夫婦になっても，出家の功徳は消えるものではない）から，還俗してもやっぱり，出家の功徳を力になされよ(14)。

先述のように，門前真一氏は，一層の仏道修業を勧める書とされる。「もとの御契り」を氏は，薫との「契り」ではなく，浮舟の生命を救い，出家の導師となった横川僧都その人との出会い，その宿縁としての「契り」と解釈される。この解釈は卓見であると思う。けれども「もとの」という修飾語は過去の意を表わしており，それは，現在に続いている僧都との出会いと解釈するよりむしろ，過去に断絶された薫との出会いと解釈する方が自然ではないか，とも考えられるのであるが，いかがであろうか——。氏によれば，以下のように僧都の書簡を解読することになるであろう。

拙僧との出会いの宿縁をたがえることなく，（修行を確実に勤めて清い生活を送り，よき模範となって）愛執の罪をなくして差上げなさい。（『心地観経』にあるように）一日出家の功徳さえこのように大きい。（この貴い恵まれた出家生活を決して捨ててはなりません。）さらにたゆまない修道をつづけなさい(15)。

私は先に述べたように，具体的な進路を示したものとはせず，限りない仏の慈悲を示したものとして，次のように解読する。

以前の，大将殿（薫）との出会いの因縁を過ちなさることなく（その不可思議を思い慎しみ），（大将殿の）愛執の罪を晴らしてさしあげなさいませ。（人間のごくささやかな行ないである）一日の出家でさえも，御仏はあわれみ給うて，量りしれない功徳となし給うほどその慈悲は深いのですから，やはり，すべてを御仏の無量寿にたのんでおゆだねなさいませ。（そして，その内にあって未来を御決断なさいませ。その決断がどのようなものであろうとも，御仏の慈悲はなお，あなたの上にありましょう。）

以上，三つの解釈を示したが，書簡文そのものからは，いずれも不可能とすることはできない。

（2）『物語』における僧都の人格とその信仰思想から考察するに，本章，A，に見たように，僧都は『物語』中，きわめてラディカルな思想の持主として描かれている。いかに身分の軽い人間，しかも女性をも，仏の救いにあずかる大切な者として深く思いやり，尊重している。その信仰を，あえて人間中心的ということさえ可能である。しかし，僧都は浮舟に還俗を勧告したであろうか。私にはそうは思えない。そのゆえは，以下のごとくである。

僧都は，浮舟の出家にあたっては，慎重を極めた。それは，若い浮舟にとって再び世俗の生にひかれる契機も多かろうこと，つまり，このような場合も起りうることを，憂えたからにほかならない。「ただ御行ひをし給へ」と(16)，行く末覚束なげな若い浮舟を，幾度も幾度も励ましながら，帰山した僧都だった。薫が訪れたことによって，ことの真相を知らされたときに，僧都は浮舟の道心の揺らぐであろうことに思いを馳せて，たいそういとおしがっている。僧都は薫に乞われた案内をも拒み，さらに添文をも，「なにがし，このしるべにて，かならず，罪得侍りなむ」と，一度は拒んだ(17)。僧都は還俗を，あきらかに反価値としている。ようやく重い筆を執ったその筆で，僧都が突然価値観をひるがえし，浮舟に還俗を勧めるとは考えられないのである。

案ずる僧都に，薫は，浮舟の道心を乱すような罪深いことをするつもりは更になく，ただその母に浮舟の消息を知らせて安心させたいのみであると訴える。「げに」，とうなずきながらも，僧都は薫自身よりはるかに深く，薫の本心を知っていたであろう。僧都の案に相違せず，薫は浮舟の許におくった文に，「法の師とたづぬる道のしるべにて思はぬ山に踏み惑ふかな」と，いささか恥じるふうに歌を添えた(18)。その文と歌とを読み，浮舟は思い乱れて泣き臥す。その浮舟の姿も，すでに薫の訪問を受けたとき，僧都のまなかいに浮んでいたであろう。

「髪，鬚を剃りたる法師だに，あやしき心は失せぬもの」と，社会関係における人間の執心の深さを認識する僧都である[19]。それは，過ぎ来し方の自己を顧みての告白であったかもしれない。しかし，「愛執」と呼ばれるこの執心が強く深ければ一層，その超克を志して決断する「出家」，その貫徹が意味を持つのであり，僧都はあえて，不犯の生涯を過したのであった。浮舟，薫，各々への理解と同情が，いかに深く篤くとも，還俗を勧めたとは考えられない所以である。僧都は，願わくは浮舟に，このまま出家にとどまり，仏道修行に勤めてほしいと，心中願っていたかもしれない。

けれども，僧都ははたして浮舟に，そうした修業への願いを強要したであろうか。絶対に還俗してはならぬ，と指示を与えたであろうか——。私にはそうは思えない。僧都は自身を，「我，無漸の法師にて」とも自省しており[20]，きわめて謙虚な人柄である。その本人の意向さえ確かめずに一人の人間の生涯を左右するような指示を，自身の賢しらな判断でするであろうか。かつまた僧都にとって，仏とは前述のように，魚をも鹿をも人の命をも，すべてをかなしんで，「かならず，救ひ給ふ」存在であるゆえに，その救いのうちに浮舟の行方を，ゆだねなかったであろうか——。僧都がいかにそれを願っていたとしても，還俗否定を示したとは考えられないのである。

第二に，それにもかかわらず浮舟は還俗しないという主張に関して。

浮舟は蘇生後，過去の情痴におぼれた生活を「怪しからぬ」ことと厭うており，折ふし薫の篤実さを懐しむことさえ，「なほ悪の心や。かくだに思はじ」と，思いかえている[21]。浮舟にとってすでにすべての男女の間柄は，そこに帰る価値を持たない。世の無常を思い宿世のつたなさを思い罪障の深さを悔いてした浮舟の出家の動機は，『物語』に見られる多くの出家の動機の内でも，もっとも切実なものである。有情の人間のこととて心の揺らぎはあろうとも，ひたすらに世をのがれ後生を願う浮舟の道心の奥底は，堅固としなければならない。さればこそ心を強くなして，思い乱れ，泣き臥しながらも，使いに来た弟の小君に，ついに会おうとさえしない[22]。そして，長い『源氏物語』は，浮舟の尼姿を最後にその幕を閉じるのである。

以上，僧都の側からと浮舟の側からとの考察を試みたように，多くの人脈を辿り，なかんずく理念的には，大君の結婚否定の倫理を受け継ぐ者として造型されたと見られる浮舟が，再び結婚につづいてゆく異性愛に埋没するであろうとは，考えられない。大君，そして蘇生後の浮舟には，貴族社会に準拠することを自明としえない式部の，「世づかぬ」人格の部分が託されている，と言えよう。なかんずく浮舟には，『紫式部日記』に見られる式部の出家への憧れが[23]籠められていると言えるであろう。自身迷いの人であり，「たゆたい」の人であった式部の[24]，いわば達しえない自己の理想像が，すがすがしく出家して行いに励む浮舟であったのではなかろうか。

だが，浮舟の信仰はいかにも狭い。ともすれば心に自然と浮かぶ過去の思い出さえも断ちながらひたみちに行いに勤む浮舟の信仰は，わが身ひとつの救いを願うものであり，誤解をおそれずあえて言えば，小乗的なものである。それは，彼岸から再び此岸に帰って，新しい倫理の拠点，すなわち社会関係における「愛」の支えとなる力を，持ちあわせてはいない。

しかし，導師，横川僧都との関わりは，身一つの救いしか視野にない浮舟の信仰に，人倫的広がりを与えるであろうと，私たちは期待してよいのではなかろうか。「愛執の罪を晴るかし聞え給」えよと，浮舟に勧める僧都である。

宇治十帖前半に，八宮を導く宇治阿闍梨の峻厳無比な信仰が，旧天台教正統的なものを反映しているとするならば，横川僧都のそれは，起こりつつあった新浄土教的なニュアンスを持つものであり，恵心僧都源信がモデルと言われる所以である。宗教が，世俗における悩み多い諸々の社会関係の避けどころとなり，その意味での救いとなるばかりではなく，再び社会関係の内に深く浸透して，それを新たに嚮導するものとなるのは，次の鎌倉時代を待たなければならない。しかし見てきたように，横川僧都の人間像の内に，その萌芽は見えるのである。

『今昔物語』巻十五・「源信僧都母尼往生セシコト」に，源信が，自分は母の臨終に侍してその往生を助け，母はまたかつて自分を聖の道に勧め

入れたのであることに想いをめぐらして，「祖ハ子ノ為，子ハ祖ノ為，无限カリケル善知識ナルカナ」と，告白する記事が見える[25]。それはまた母の臨終の作法を助けるために山を下った僧都を思わせるものである。さまざまな社会関係のうちでも，男女関係と同様親子関係は，その成立に深く生物的根拠を持つものであり，その根拠に由来する情愛の濃やかさは仏道へのほだしとして，道心ある者の心を葛藤させてきたのであった。『物語』にも，女三宮にひかれる朱雀院，大君・中君にほだされる八宮等の姿がリアルに描かれている。しかし，源信の告白したように，仏の救いを偕に志向し，その救いに偕にあずかることによって，ほだしでもある親子関係や男女関係は，此世ない「善知識」とも変えられるのである。「煩悩即菩提」の意味ではなかろうか——[26]。

浮舟の導師であり，仏の慈悲にすがって薫の愛執を晴らせと浮舟に教える横川僧都はまた，薫の師でもある。薫は折にふれ，横川に僧都を訪れている。この僧都を偕に師といただく浮舟と薫との間に，大君と薫との間には終に不可能と終った「愛」の交わりの可能性が，おのずと期待される。なぜなら，死に至らせた恋の苦悩と，僧都の手による蘇生，そして自ら強く望んでした出家，その後の修行，これらを通して深められる浮舟の人格は，大君の人型としての役割を越えるに足るものであり，その浮舟を理解するほどに薫が成長することが期待されるのであって，そのようなかけがえのない人格の相互の認識と，その交流と，そこに生ずる融和とが，まさに先に定義した意味での「愛」にほかならないからである。

（1）「手習」第18巻 345ページ
（2）「手習」第18巻 353ページ
（3）「手習」第18巻 354ページ
（4）「手習」第18巻 358ページ
（5）「手習」第18巻 383ページ
（6）「手習」第18巻 388ページ
（7）「手習」第18巻 339ページ
（8）石田瑞麿氏は，『往生要集』序文「予が如き頑魯の者」，第六章第二「往生の事に非ざるよりは余の事を思ふこと勿れ」と，『源氏物語』「手習」巻の，「われ無慚の法師にて忌む事の中に破る戒は多からめども……」「念仏より外のあだ業なせそ」という横川僧都のことばを対応させ，また，『物語』成立年代と源信の年齢などを考えあわせて，横川僧都に「源信その人を思い描くことができるようである」と述べておられる。（『往生要集』解説　東洋文庫）
（9）「夢浮橋」第18巻 428. 429ページ
（10）中村良作「夢の浮橋論」國語国文　昭和18年7月
（11）重松信弘『源氏物語の仏教思想』，（平楽寺書店），岡一男『源氏物語の基礎的研究』（東京堂）秋山虔，前掲書
（12）手塚昇『源氏物語の再検討』（風間書房）
（13）多屋頼俊『源氏物語の思想』（法蔵館），門前真一『源氏物語新見』（門前真一教授還暦記念会）広川勝美「浮舟の救い」日本文学　昭和39年3月
（14）山岸徳平『源氏物語』（日本古典文学大系，岩波書店）頭註より構成させていただいた。
（15）門前真一，前掲書，「宇治十帖の構成と浮舟の還俗問題」本文より構成させていただいた。
（16）「手習」第18巻 398ページ
（17）「夢浮橋」第18巻 423ページ
（18）「夢浮橋」第18巻 433ページ
（19）「夢浮橋」第18巻 422ページ
（20）「手習」第18巻 353ページ
（21）「手習」第18巻 384ページ
（22）浮舟の弟の「小君」という呼称は，「夢浮橋」に至ってはじめてあらわれるものであり，これは空蟬の弟の小君と対応する。この呼称は，空蟬が二度と源氏に身をゆるさなかったように，浮舟が薫のために還俗することはないということを暗示している，と，岡一男氏は述べておられる。（岡一男，前掲書 542ページ）
（23）式部の出家への憧憬は，『日記』中の，いわゆる「消息文」と呼ばれる部分に見ることができる。（古典文學大系第19巻，岩波書店，501ページ）
（24）「たゆたいの人」と式部を評するのは，亀井勝一郎氏である。式部の中には，一人の「女房」と一人の「隠者」とが，同居しており，そのいずれにも徹しえずたゆたったのが，紫式部であった，とされるのである。（亀井勝一郎「源氏物語」，日本人の精神史研究，第二部収録，文芸春秋社）
（25）『今昔物語』巻十五，「源信僧都母尼往生セシコト卅九」日本古典文學大系，岩波書店，第24巻）
（20）源信『往生要集』に，「煩悩は即ち菩提なり。一一の塵労門を翻せば，即ち是れ八万四千の諸没羅密なり。無明の変じて明と為るは，氷を融かして水と成すが如し」とある。（花山信勝訳註，岩波文庫147ページ）